

バレエを愛する子供たちを広く迎え入れ、 内面から表現する豊かな魂を育てたい

YUNO BALLET (東京都・豊島区)
主宰・藤井由乃

創設5年目、現在も口コミだけで生徒が集まるアットホームなスタジオ。主宰の藤井由乃さんは、貝谷八百子バレエ団出身で大学院卒、さらにバレエ専門学校の講師経験もあるという豊富な経歴の持ち主だ。住宅街の公民館でスタートした教室は、'09年改装の自宅スタジオに拠点を移したばかり。通りすがりの窓からちよつと覗いてみたくなるレッスン風景は、小さな生徒を惹きつける魅力がたっくさん詰まっているようだ。

イメージからバを学ぶ楽しいバレエ

駒込駅から程近い住宅街の中に建つスタジオは、その日、玄関先をたくさん傘が彩っていた。こんな雨の強い日でも、生徒たちはバレエが楽しみ、そんな子供たちの幸せそうな笑顔が、丸く切った窓の奥にちらちらと見える。ドアを開けると、バ

ッと明るい稽古場が広がり、バレエへの距離が近いという印象。その近さはどうやら物理的な距離だけではなさそうだと、明るく優しい藤井さんの声を聞いてそんな風感じた。

ここは昨年改装したばかりの自宅スタジオで、5年前に公民館で始めたスタジオを移転させた。当初園児だった子供たちも小学生となり、現在は園児から小学生までの約100名の生徒が所属する。クラスは年齢とレベル別に分けた6クラス。今回は中でも頑張り盛りの小2・オデットクラスと、小3〜小6のスワニルダ・キトリ・ライモ

ンダクラスのレッスンにお邪魔した。オデットクラスに参加したのは14名。小2からようやく片手バーの練習も始まり、プリエでは同時にポール・ド・ブラも教わっていた。

「お顔は最初横だよ。プリエしたらお顔はこっち、まだバーの方を向いているよ」

藤井さんは母親のように優しく丁寧な説明で見本を見せる。タンデュは両手バーで行った後片手バーでポール・ド・ブラと共に練習。またグラン・バットマンでは片手を腰に固定して練習するなど、レッスンは基礎を疎かにせず、順を追ってレベルアップできるよう、細かい指導で進められていた。

園児の頃はリズムで踊る楽しいバレエに触れ、小1ではバレエの基礎に出会い、小2で美しいバレエの動きを知る。段階を踏んだ藤井さんの指導は、少しずつバレエへの興味を深めながら、技術や表現力を向上させる工夫がなされている。その

つながると藤井さんは期待している。

バレエを愛する「心」から教えたい

高学年のスワニルダ・キトリ・ライモンダクラスは18名が参加。バーはタンデュやジュテなど基礎を重点的に行うものから、教種のパを含むロンドウジャンプ・アタールなどが盛り込まれる。また両手バーのエシャペではビルエツトも練習する。「みんな、ビルエツトの動力は腰だよな? けん玉のヒモをねじるみたいにプリエの脚と上半身をねじっておいて、ほどくように回ってみるよ!」このクラスでも藤井さんのイメージは効果抜群。腕を振って力の入りすぎた回転ではなく、力の抜けた軽やかな回転があちこちで成功していた。



大きな特徴が、RADの指導法にならったイメージによるバの習得。藤井さん独自の言葉の表現が、子供たちを楽しいバレエの世界に惹きつけている。例えばセンターで、タンデュしながら美しく歩く練習では「ドレスをつまんで王子様に会いに行くよ」と説明し、腕の形とエレガントな動作をイメージから習得させる。片手のアン・ナヴァンは「大きな籠を持ってそこにお星様を入れる」動作をし、片手を丸く固定するイメージを抱かせる。「教師の役割は、教えるということよりも、イメージを与えることだと思う」

外側から説明するよりも、バの形を感じてもらうことが上達の近道。そして幼少時にイメージしたり感じたりする体験が、やがて豊かな表現力に



2009年 YUNO BALLET 発表会「くるみ割り人形」全幕 ©長谷川清徳



2009年 YUNO BALLET 発表会「くるみ割り人形」全幕 ©長谷川清徳

イメージは余計な力を抜き、自由に動ける身体を作る。センターではさらに一歩進んで自由に表現することにも挑戦する。ワルツのアンシエヌマンを一人ずつ踊り、ピケ・ターンで終わる最後はオリジナルのポーズで決める。藤井さんは、「好きなポーズでいいのよ。でも人と違うものにしてね」と、あえて個性を出すことを要求した。

生徒たちは各々緊張しながらも、最後のポーズを前アチチュード、ピケ・アラベスク、後ろタンデュなど、様々なポーズでフィニッシュする。これは表現力と度胸を鍛えるための練習だそうだが、最初は怯んでいる子でも、そのうちうまく自分を出せるようになるらしい。「引つ込み思案の子だって、本当はみんなに見てほしいと思ってる。みんなバレエに魅せられて、ここに来ている子たちばかりなんですからね」

丁寧な指導と生徒の気持ちをも汲む包容力が藤井さんの魅力。それは子を持つ母であることだけでなく、過去の様々な経歴がバランスの取れた指導法へと結びついている。

藤井さんは4歳からバレエを始め、中学生から成人までの長い年月を貝谷八百子バレエ団で過ごしてきた。この日本バレエの創世記を作ってきた伝統あるバレエ団で育ったことで、技術の習得以外にも、精神のあり方まで深い影響を受けたという。「とにかく先生方のバレエに対する愛が深かった」というバレエ団では、バレエ芸術に敬意を払い、踊れることに感謝すること、また稽古場や衣装を大事にし、先生や先輩を敬うことがバレエリナーとしての心得だと教わってきた。最近ではバレエもカルチャーセンターで気軽に始められ、誰でもコンクールに参加できる時代。だが、やはりバレエは人の心に感動を与える繊細な芸術であり、表現者は慎ましい精神でバレエと向き合うべきと、藤井さんは考える。

「普段から品良く生活していなければ、本物のお姫様は踊れない」

技術だけでなく、真の芸術家として踊れるようになるためにも、普段の生活を正すことからバレエというものを教えていきたいと熱く語る。母のような包容力は、そんな真摯な望みから湧き出てくるものなのかもしれない。

誰にでも門戸を広げる温かなスタジオに

生前の貝谷先生は、バレエを愛する以外にも、趣味や学問など全てのこと踊りに表れてくる、と教える教師だった。藤井さんも勉学に励み、大学進学後は早稲田大学大学院に進み、舞踊の研究にも打ち込んだ。さらに現役のバレエ団員を続けながら、貝谷芸術専門学校で教鞭も取った。知識と経験を積んだ藤井さんにはたくさんの引き出しがある。そんな豊富な経歴が、生徒と父兄たちの信頼を集める確かな基盤となっているに違いない。ここ豊島区は都心で教育熱心な家庭が多いため、受験でバレエをやめる生徒も多い。勉学に励む子も、バレエ一筋で頑張る子も、趣味で踊りたい子



も、皆バレエを愛する気持ちは同じ。「将来の道に進んでもバレエの経験はきつと役に立つはず。だからどんな生徒でも個々の夢をつかめるようサポートしてあげたい」と藤井さんは望む。プロを目指す生徒を、大切に、全力で育てていきたい。しかし、その一方で生徒たちが大人になっても、いつでも戻ってこられる故郷のような場所でありたいと願う。地域に愛され、子供から大人まで様々な生徒たちが集う、そんな門戸の広いスタジオを目標している。

ドアを開ければ、そこはいつも温かく迎え入れてくれるバレエの故郷。心の距離も近いスタジオは、冷たい雨の夜もほっとするような温もりに包まれ、子供たちの笑顔がいつまでも華やいでいた。

(取材 落合わか奈)



藤井由乃 (ふじい ゆの)

早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修了。日本バレエ協会正会員。4歳よりバレエを始め、12歳で貝谷芸術学院バレエ科に入門。貝谷八百子バレエ団に入団後、「白鳥の湖」のソリストなど内外の各公演で活躍。現役活動の傍ら、大学院で舞踊の研究。貝谷芸術専門学校で教鞭をとり、ヤン・ヌイツ、RADなどの教師講習を受講。退団後、また、'03年にYUNO BALLET設立。バレエに関する出版物の編集・執筆にも携り、多方面からバレエの普及に尽力している。